

「好ましさ」の印象形成要因 ―ケーススタディを通して―

崔 文姫

1. はじめに

日本語学習者（以下、「学習者」と称する）が日本語母語話者（以下、「母語話者」と称する）とコミュニケーションを行う場合、母語話者が学習者に対して印象を形成していく中で、母語話者は学習者の発話をどのように捉えるのだろうか。崔（2005・2007a・2007b・2008a・2008b）は、日本語学習者を対象に、日本語母語話者による評価と分析を行い、母語話者が学習者に対して抱く印象とその印象に影響を与える要因について報告した。印象形成研究では、崔の研究のように、認知者側に注目をし、刺激人物からの情報だけではなく、認知者側の広い意味での知識（性・人種・職業などに関するさまざまな既有知識やステレオタイプ）やパーソナリティが強く影響を及ぼしているとされている。

崔（2009）では、さまざまな言語・文化背景を持つ20人の学習者に対して母語話者が評価を行った。その結果、学習者に対して母語話者が抱く印象は、学習者の背景のみならず母語話者の属性などによっても異なることが明らかになった。しかし、学習者の中には、母語話者の属性などを問わず、ほとんどの母語話者に著しく良い印象を与えた学習者がいた。同様に、著しく悪い印象を与えた学習者もいた。これは、母語話者が前提として持っている知識やパーソナリティ以上に、学習者からのさまざまな情報が、母語話者の印象形成に大きく影響を与えたと考えられる。誰にでも明らかに好印象／悪印象を与える人がいるのであれば、それはその学習者の持つ特徴のほうが大きく影響を及ぼしているからだと考えられる。そうであれば、崔（2009）で対象にしている学習者の中で、どのような学習者（のどのような特徴）が、母語話者に好印象／悪印象を与えるのかについて、ケーススタディを通じて明らかにすることは意義のあることである。

そこで、本稿では、日本語母語話者が日本語学習者に対して好印象を持つことを、学習者を「好ましい人である」と評価することと考え、著しく良い印象を与えた学習者と著しく悪い印象を与えた学習者を中心に、それらの印象形成に影響を与える学習者側の要因について分析・考察を行っていく¹。具体的には、崔（2009）で用いられ

¹印象形成過程の研究で1960年代に盛んになったものとして、情報統合理論（information integrati

た「対人印象に関する評価」20項目²の中から「好感のもてる人だ(好感)」「親しみやすい人だ(親しみやすい)」「好きになれそうだ(好き)」の3項目を「好ましさ」に関する項目として選ぶ³。

2. 目的

学習者と母語話者の発話ビデオを用い、母語話者が学習者に対して好ましさに関する評価が高い場合及び高くない場合の要因について、ケーススタディを通じて考察することとする。さまざまな言語・文化背景を持つ20人の日本語学習者の中から、「好感」「親しみやすい」「好き」などの「好ましさ」に関する項目の評価が高い(印象が良い)学習者と、それらの項目の評価が低い(印象が悪い)学習者2名ずつ選び、それぞれ良い印象と良くない印象を与える要因について、学習者からの刺激情報及び調査の過程で得られたコメント⁴などをもとに考察していく。

3. 方法

3.1 評価材料(刺激ビデオ)

学習者と母語話者(アナウンサー、女性、30代後半)による発話(20組)であり、発話の最初の5分間を対象とし、学習者だけを正面から映したものにアナウンサーは映さずに声だけが入るようにした。作成された刺激ビデオ(評価材料)は、のちに135名の母語話者に評価してもらうことになるが、ビデオで視聴する会話の提示順が評価に与える影響をできるだけ排除するため、会話の提示順をランダムに並べ替え、20人の学習者を視聴する順番が異なる5種類の刺激ビデオを作成した。評価者はそのうちの一つを視聴する。

また、本研究は学習者の日本語運用能力が中級レベル以上の学習者を対象としているが、そのレベルの判定は学習者の自己申告及び日本語学校での所属クラス、滞在期間、日本語能力試験の有無、筆者とのインタビューなどを総合的に鑑み、それぞれ判

on theory)がある。これは、印象を主に「好ましい」かどうかという評価の次元から捉え、「好ましさ」の評定値を刺激人物から出るさまざまな情報の評定値の代数的結合によって予測しようとする試みである(西郡1997)。結果的に、本稿での分析方法はこの情報統合理論に近いといえる。

² 後述の表2を参照。

³ 崔(2009)では各グループ別因子分析の結果、これら3項目が他の項目より高い相関を見せており、これを「(個人の)好ましさ」因子として解釈することができた。

⁴ 調査時に、時間の制約上、母語話者を対象にフォローアップインタビューなどを行えなかった。しかし、その中には調査後に自由に感想・意見を言ってくれる母語話者がいた。それらをその都度、ICレコーダーに録音していたので、ここで参考にする。

断した⁵。下記の表1に日本語学習者の構成を示す。

表1 学習者の構成（年齢・学習時間などは調査時点のもの）

学習者	性別	年齢	国籍(母語)	レベル	滞在期間	学習時間	能力試験	
1	KRMA	男	29	韓国 (韓国語)	上級	2年2カ月	日本語学校1年半(上級)終了	1級
2	KRFA	女	20	韓国 (韓国語)	上級	11カ月	日本語学校上級クラス在籍 (+高校480時間)	
3	KRMI	男	25	韓国 (韓国語)	中級	11カ月	日本語学校中級クラス在籍	
4	KRFI	女	26	韓国 (韓国語)	中級	6カ月	日本語学校中級クラス在籍 (+韓国私設学院320時間)	2級
5	CHMA	男	24	中国 (中国語)	上級	1年8カ月	日本語学校1年半(上級)終了	1級
6	CHFA	女	30	中国 (中国語)	上級	5年2カ月	日本語学校2年終了+日本の大学卒業	1級
7	CHMI	男	26	中国 (中国語)	中級	1年8カ月	180時間 (中国の語学学校)	2級
8	CHFI	女	25	中国 (中国語)	中級	2年	日本語学校1年終了+大学授業150時間	2級
9	INMA	男	20	インドネシア (インドネシア語)	上級	1年2カ月	国際交流基金1年終了+大学授業90時間	
10	INFA	女	24	インドネシア (インドネシア語)	上級	4年2カ月	日本語学校1年終了+大学授業・私設期間200時間+5か月日本に交換留学	1級
11	INMI	男	18	インドネシア (インドネシア語)	中級	8カ月	日本語学校204時間+大学授業72時間	3級
12	INFI	女	29	インドネシア (インドネシア語)	中級	2年1カ月	日本語学校中級クラス在籍 (+ユネスコ140時間)	2級
13	THMA	男	20	タイ (タイ語)	上級	2年2カ月	日本語学校1年終了+大学授業90時間	1級
14	THFA	女	30	タイ (タイ語)	上級	2年2カ月	大学別科576時間+大学授業1200時間	1級
15	THMI	男	21	タイ (タイ語)	中級	9カ月	日本語学校中級クラス在籍 (+その他240時間)	
16	THFI	女	19	タイ (タイ語)	中級	9カ月	日本語学校中級クラス在籍	
17	EGMA	男	27	カナダ(英語)	上級	3年3カ月	日本語学校上級クラス在籍 (+その他約240時間)	2級
18	EGFA	女	24	イギリス (英語)	上級	11カ月	日本語学校上級クラス在籍 (+国で約100時間)	
19	EGMI	男	37	アメリカ (英語)	中級	10カ月	日本語学校中級クラス在籍 (+国で約200時間)	3級
20	EGFI	女	24	イギリス(英語)	中級	8カ月	日本語学校中級クラス在籍	

⁵ 学習者の情報に関しては、調査後に記入してもらったフェイス・シートを参考にしている。

表注：学習者の欄において、最初の2文字「KR/CH/IN/TH/EG」はそれぞれの言語を意味し、3番目の「M/F」は性別（M：Male，F：Female）を、最後の「A/I」はレベル（A：Advanced，I：Intermediate）を表す。例）KRMA：韓国語母語話者（韓国人）男性、上級レベル。

3.2 評価項目

母語話者が学習者を評価する際に用いられる評価項目は「言語・パラ言語及び非言語的特徴に関する評価」項目群と「対人印象に関する評価」項目群の2つから構成される。この項目の選定においては崔（2005、2008a）に従う。下記の表2に本研究で使用された40の評価項目を示すが、表中の番号は後述する図2～図9までの項目の番号（横軸の番号）と同一であることを断っておく。

表2 評価項目

I. 言語・パラ言語及び非言語的特徴に関する評価		II. 対人印象に関する評価	
1	正しい文法を使っている。	21	積極的な人だ。
2	一つ一つの言葉を正しく発音している。	22	責任感が強そうな人だ。
3	イントネーション（抑揚）やアクセントが正しく、分かりやすい。	23	率直な人だ。
4	話し方が流暢である。	24	親しみやすい人だ。
5	語彙の使い方が正しい。	25	元気な人だ。
6	話し方が丁寧である。	26	自信のある人だ。
7	質問に適切に答えている。	27	誠実な人だ。
8	単語や表現をよく知っている。	28	しっかりした人だ。
9	話し方が日本語的として自然である。	29	信頼できそうな人だ。
10	フィラー（えーと、まあ、等の言い方）の使用が多い。	30	好きになれそうな人だ。
11	語尾伸び（私は一、～ですが一、等の言い方）が多い。	31	知的な人だ。
12	途中終了の言い方が多い。	32	魅力のある人だ。
13	話し方は、二人で対話することに協力的である。	33	まじめな人だ。
14	視線の合わせ方が適切である。	34	礼儀をよくわきまえた人だ。
15	あいづちの打ち方が適切である。	35	明るい人だ。
16	間の取り方が適切である。	36	好感の持てる人だ。
17	話し方のスピードが適切である。	37	活発な人だ。
18	表情が豊かである。	38	話しやすい人だ。
19	身振り手振りが多い。	39	協調的な人だ。
20	外見が魅力的である。	40	落ち着いた人だ。

3.3 評価方法

学習者の発話ビデオを視聴して、あらかじめ用意してある調査表に、「言語・パラ言語及び非言語的特徴に関する評価」20項目と「対人印象に関する評価」20項目のすべてについて5段階で評価をする方法をとった。

この調査は、2007年12月から2008年5月にかけて行い、一人につき約2時間半から3時間の調査時間が費やされた。評価者は東京都内や東京近辺に居住する日本語母語話者135名である。下記の表3に評価者（母語話者）の構成を示す。

表3 母語話者の構成

属性	日本語教師	大学生	主婦	社会人男性	計
年齢	24歳～71歳	18歳～22歳	35歳～76歳	28歳～74歳	
男	5人	12人	0人	31人	48人
女	33人	21人	33人	0人	87人
計	38人	33人	33人	31人	135人

4. 結果

4.1 「好感」「親しみやすい」「好き」の3項目に関する平均値

20人の学習者に対して、3項目（「好感」「親しみやすい」「好き」）に関する母語話者135名の評価の平均値を下記の図1に示す。

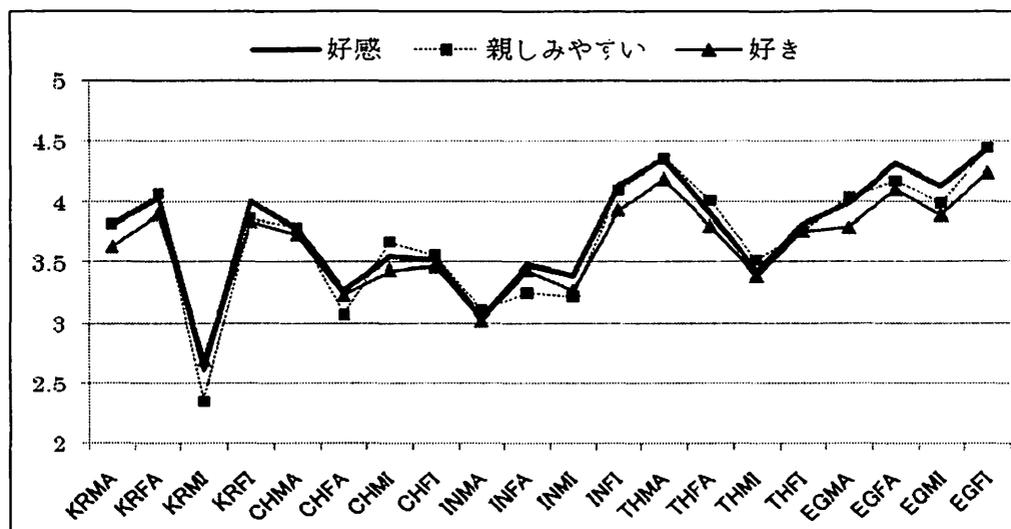


図1 「好ましさ」評価の平均値

この図1から分かるように、3項目に関する母語話者の評価点がほぼ同じような曲線を描いており、この3項目は相関が高いと推測される。実際、崔(2005、2008a)における因子分析を見ると、これら3つの項目は常に高い相関を示していた。概して、ここで一番高い評価を得ている学習者は「EGFI」であり、続いては「THMA」の評価が高い。また、評価が低い学習者は「KRMI」「INMA」などの順になっている。これらの3項目を、便宜上「好ましさ」とすれば、母語話者は学習者「EGFI」と「THMA」を最も好ましい人であると思ひ、「KRMI」と「INMA」を最も好ましくないと思ひていると考えられる。なお、3つの項目をまとめて平均値を求めると、EGFIは「4.37」、THMAは「4.30」であり、KRMIは「2.56」、INMAは「3.06」であった。この平均値は20人の学習者の中で、「EGFI」と「THMA」が最も高く、「KRMI」と「INMA」が最も低い学習者である。

4.2 良い印象を与えた学習者に対する考察

ここでは、「好ましさ」の項目に関して、母語話者が高く評価をした学習者2人「EGFI」「THMA」について考察していく。

4.2.1 ケース1「EGFI」(中級レベル・女性・イギリス人)

「EGFI」は、20人の学習者の中で母語話者が好ましい人として最も高い評価を与えた学習者である。この学習者は日本での滞在時間も他の学習者と比べると、最も短く、また日本語学習時間も少ない中級レベルの女性である。下記の図2と図3に、学習者「EGFI」に対する母語話者の評価の平均値を示す。

下記の図2から明らかなように、言語の正確さに関しては母語話者からの評価が低い。文法(1)や発音(2)はもちろん、単語・表現力(8)も乏しいし、話し方も自然(9)だとは評価されていない。反面、会話に協力的(13)で、視線の合わせ方(14)及び表情(18)、身振り手振り(19)、外見(20)では高い評価を得ており、さらに元気(25)、明るい(37)などで高い評価を得ている⁶。高い評価を得ているこれらの項目は、「好ましさ」に関する項目と高い相関があり(崔2007b・2008a・2008bの因子分析の結果より)、好ましさに関する評価が高いのは、それらの影響だと考えられる。

⁶ () の中の数字は図2・図3の横軸の数字と同一である。

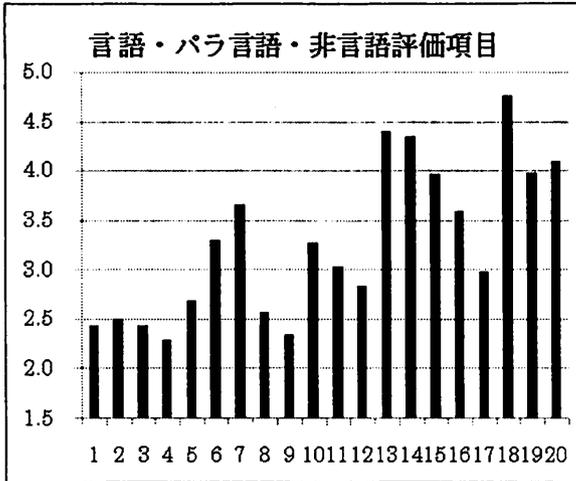


図2 「EGFI」に対する評価の平均値

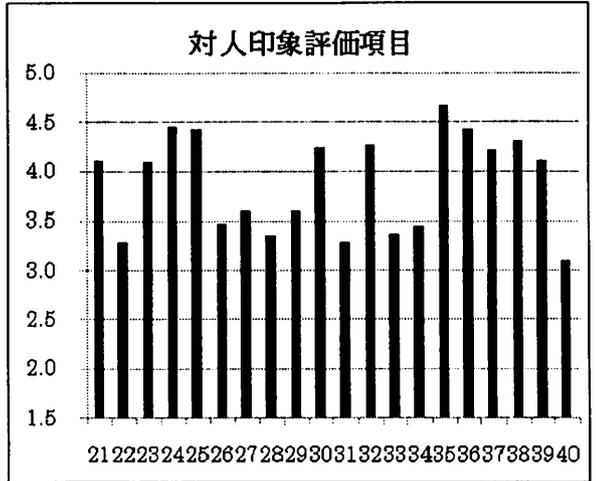


図3 「EGFI」に対する評価の平均値

筆者自身も、この結果同様、学習者「EGFI」は表情が豊かで笑顔の絶えない人であり、話をする際には身振り手振りを使い懸命に表現を補っていたので、明るくて元気な印象を受けた。また、決して日本語は流暢ではないが、相手（インタビュアー）の話に注意深く聞き、インタビュアーとできるだけ視線を合わせようとしながら熱心に答えようとしていたので、良い印象を持った。

視線行動が会話者間の印象形成に与える影響を実証的に検討した磯ほか（2004）によれば、視線量が多ければ多いほど好印象を獲得すると報告しているが、この学習者「EGFI」は視線をインタビュアーに向けて会話への積極性参加を示すことにより好印象を抱かれたと思われる。

調査後に母語話者の何人からも言われたのは、「この人は日本語はとても下手だけど、日本語そのものではなく、表情や明るさなどからとても良い印象を持つ」とのことだった。さらに、ある母語話者は、「インタビュアーの話聞く姿勢がいちばん懸命で、それはもしかすると日本語の問題もあって聞き逃さない努力であったかもしれないけど、だからこそその一生懸命さが良い印象につながる」とコメントした。さらに、ずっとインタビュアーに視線を合わせて対話を進めていたことも良い点として挙げられていた。

これらのことから、たどたどしい日本語で話しても、相手の話を熱心に聞いて、視線を適切に合わせ、身振り手振りなどを使いながら懸命に意思を伝達する学習者の態度、つまり、会話に対する話者の姿勢が印象に大きく関わると言える。加えて、豊かな表情や外見が魅力的であれば、それはなおさら母語話者に好ましい人として良い

印象を与えると考えられる。

4.2.2 ケース2 「THMA」(上級レベル・男性・タイ人)

次に、母語話者に好ましいと思われた学習者「THMA」のケースである。この学習者は上級レベルの男性で、タイ人である。以下の図4と図5に、学習者「THM」に対する母語話者の評価の平均値を示す。

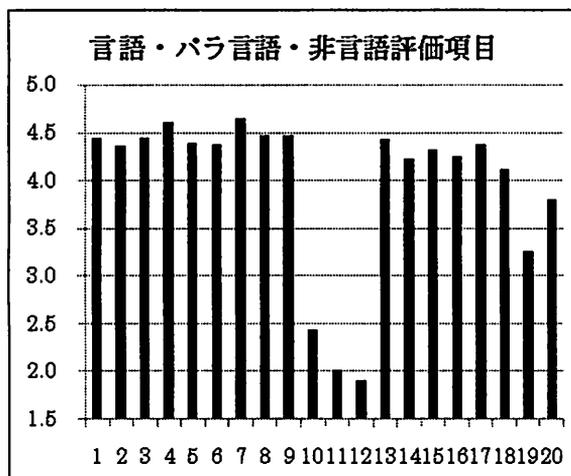


図4 「THMA」に対する評価の平均値

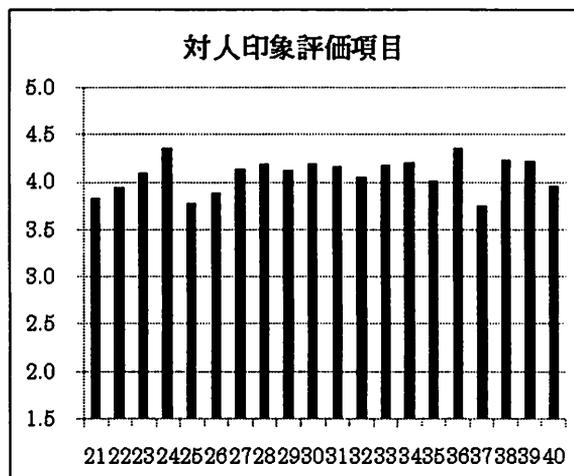


図5 「THMA」に対する評価の平均値

まず、この学習者は「言語・パラ言語及び非言語的特徴に関する評価」項目及び「対人印象に関する評価」のすべての項目で、全体的に高い評価を得ている（フィラー(10)・語尾伸び(11)・途中終了(12)は除外)。本稿で扱う好ましさに関する項目（「好感」(36)「親しみやすい」(24)「好き」(30)）だけを考えると、前述の「EGFI」のほうが少し高い評価を得ているが、全般的な評価に関してはこの学習者のほうが高いことが分かる。

この学習者は日本語運用能力が高く、2年という滞在期間からは想像できないほど言語的な正確さにおいて優れていたと思われる。実際、図4で明らかなように、母語話者は「THMA」の言語能力に関してとても高い評価を得ている。文法から始まり、発音、イントネーション、日本語としての自然さに至るまで(1番～9番までの質問)高い評価を得ている。さらに、対話に協力(13)、視線(14)、あいづち(15)、間の取り方(16)など非言語やパラ言語的特徴に関しても評価が高いことが分かる。しかし、フィラー(10)や語尾伸び(11)、途中終了(12)に関しては得点が低い。つまり、学習者「THMA」

はフィラーの使用が少なく、語尾伸びや途中で終了する言い方もあまりしないと母語話者は判断している。対人印象評価項目に関しては、本稿で対象としている「好ましさ」の項目以外でも全般的に評価が高い。

筆者は、この学習者が日本語の流暢さと自然さにおいても他の学習者より優れていると思ったが、それにも増して会話を進めていく上で、あいづちや間の取り方において秀でている印象を受けた。特に、あいづちに関しては、あいづちとしての「うなずき」までが他の学習者よりも目立っていて、それが懸命に聞いているように映った。日本語学習者ではなく日本人大学生を対象とした調査である川名 (1986) によると、話し手は、あいづちやうなずきのある相手 (聞き手) に魅力を感じ、あいづちやうなずきのない相手に対する魅力度はそれに比べるとかなり低いとされ、あいづちのある聞き手を、あいづちのない聞き手より好意的に評定するという。その結果と同様、やはり、日本語を流暢に話す「THMA」の場合も、あいづちやうなずきが母語話者の好印象につながったと考えられる。

学習者「THMA」の場合は、話す内容が母語話者の印象形成に対して大きな影響を与えた可能性も考えられる。発話の中で、「THMA」は「日本のお寿司が最初は苦手だったけど、日本の誇りなのでぜったい食べたいと思った」などのように、前向きでポジティブな内容が多い⁷。さらに、自己紹介で自分が東大に在学中であることを話しているが、調査後に何人かの評価者 (母語話者) は「東大に行ってると聞いただけで、最初からとてもまじめで日本語も流暢で自信があるように思っちゃう」「優秀で真面目な人だと思えて、そのあとの印象に影響を与える」などと言っていた。実際、この学習者はとても言語能力に優れてはいたが、学習者の背景 (学歴) が母語話者の「流暢さ」及び印象に関する評価に影響した可能性も排除できない。また、母語話者の中で特に「日本語教師」の多くから言われたのは、タイの学習者特有の発音の癖などが全くなく、とても日本語が自然であるとのことで好評だった。

このことから推測されるのは、「THMA」のように日本語運用能力が高く、流暢な学習者に対して、母語話者はやはり好ましい人であると思うようである。特に、あいづちや間の取り方が上手でも、良い印象を与える。また、「THMA」はフィラーの使用や語尾伸び及び途中終了の言い方が少ないことから、母語話者は語尾伸びや途中終了の言い方が多いと、学習者を好ましくないと判断する事が窺える。フィラーに関しても、この学習者に関しては、それを少なく使用したほうが良い印象につながるとい

⁷ 学習者の発話内容に関しては、本稿では紙幅の関係で省略する。発話内容の詳細は崔 (2009) を参照されたい。

う結果となったが、フィラーは単純に頻度が多いから印象が悪い、頻度が少ないから印象が良いというように言える性質の項目ではない。フィラーの多用が良い印象につながることもあり（砂岡ほか2007）、たまたま「THMA」の場合、フィラーの使用が少なくても良い印象につながっただけに過ぎない。フィラーの機能やバリエーションなど、研究目的によってさまざまな解釈ができることから、フィラーに関しては今後さらなる調査・検討を行わなければならないと考える。

4.3 良くない印象を与えた学習者に対する考察

続けて、「好ましき」の項目に関して、母語話者が低く評価をした学習者の2人、「KRMI」と「INMA」について考察していく。

4.3.1 ケース1「KRMI」（中級レベル・男性・韓国人）

「KRMI」は、20人の学習者の中で、母語話者が「好ましき」という観点からは最も低く評価をした学習者である。日本語運用能力は中級レベルで、韓国人男性である。以下の図6と図7に、学習者「KRMI」に対する母語話者の評価の平均値を示す。

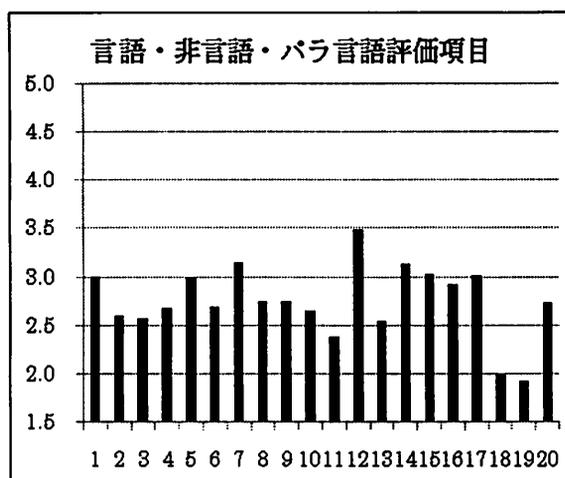


図6 「KRMI」に対する評価の平均値

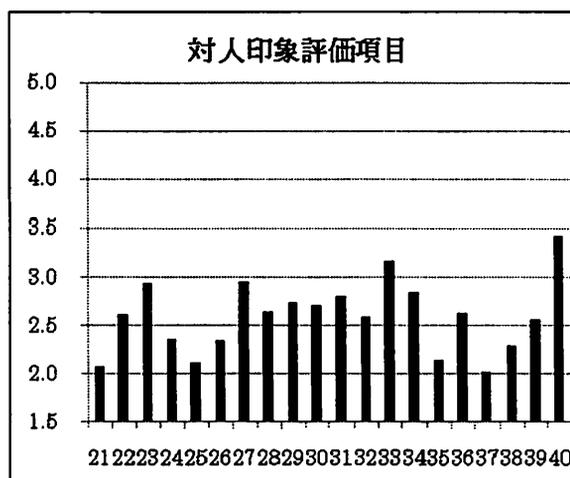


図7 「KRMI」に対する評価の平均値

上記の図6と図7から分かるように、学習者「KRMI」は他の学習者に比べ、全般的に評価が低い。「言語・パラ言語及び非言語的特徴に関する評価」項目はもちろん「対人印象に関する評価」に関しても低いことが分かる。特に、表情(18)や身振り手振り(19)に関して著しく評価が低く、この学習者は表情が乏しく身振り手振りなども

あまり使っていないことが分かる。日本語レベルが低い学習者の場合、表情や身振り手振りなどで会話を補ったりすることがしばしばあるが、この学習者にはそれがあまり見られない。しかも、話を最後まで言い切らず、途中で終了してしまう文も多い(12)と判断されている。それらが総合的に、好ましさに関して良い印象を与えていない理由であると考えられる。

また、積極(25)、元気(26)、自信(35)などにおいても低い評価が低い。筆者もこの学習者の発話を視聴するたびに毎回暗い印象を受けて、前後に来る学習者に比べ著しく良い印象を持てなかった。母語話者の評価にもあるように、積極的ではなく元気でなく、答の文も比較的短いので、インタビュアーとの会話の間の取り方もうまくできていない。そのせいで、母語話者は学習者が会話にとっても非協力的であると考えられるだろう。さらに、この学習者は声が小さく、一つひとつの答にあまり自信がなさそうにしており、短い答も多かった。それもまたとても消極的な印象を与える。実際、調査後に一番多かった感想として、この人は「なんか知らないけど、暗い」「元気がない」「大人しすぎて、逆に暗い印象を持った」などである。

これらのことから、日本語運用能力も低く、しかも表情が乏しい学習者及び身振り手振りなどを活用できない学習者には、母語話者はあまり好ましさを感じないようである。さらに、途中終了の言い方が多いことも好ましさに関して悪い印象を与える。また、消極的で元気がない人、明るくない人に対しては、母語話者は好ましい印象を持たないと考えられる。

4.3.2 ケース2「INMA」(上級レベル・男性・インドネシア人)

続けて、母語話者に好ましいと思われなかった学習者「INMA」のケースを取り上げる。この学習者は上級レベルの男性で、インドネシア人である。この学習者は上級レベルの学習者ではあるが、母語話者の言語能力の評価に関して良い評価を得られていない。以下の図8と図9に、学習者「INMA」に対する母語話者の評価の平均値を示す。

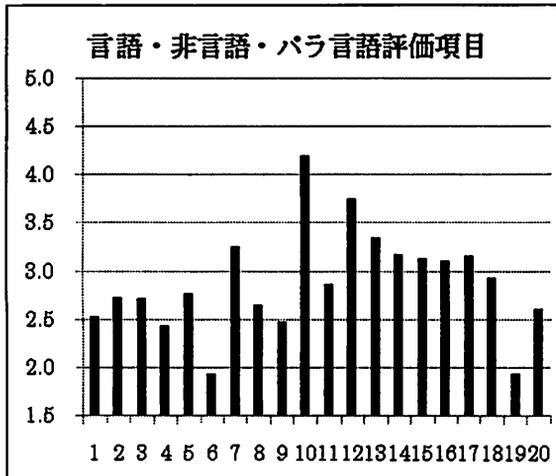


図8 「INMA」に対する評価の平均値

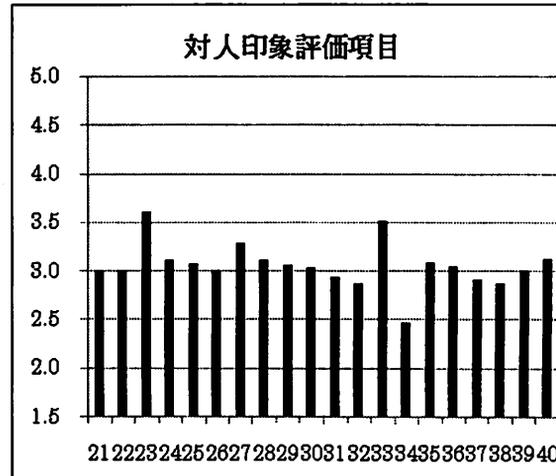


図9 「INMA」に対する評価の平均値

学習者「INMA」は、文法 (1)、発音 (2)、イントネーション (3) 及び流暢さ (4) など、言語的な正確さにおいて決して良い評価を得ていないことが分かる (図8 参照)。しかし、この学習者の発話データからは文法・語用上のエラーが一つも見られなかった⁸。

また、特徴として、この学習者は話し方が丁寧なのかどうか (6) という項目に関して著しく評価が低いことが挙げられる。つまり、学習者「INMA」の場合、話し方が丁寧というわけではなく、礼儀 (34) においても評価が低く、無礼な印象を与えている。この学習者の一番の問題は、この言葉の使い方であるように思われる。初対面での会話なのに、常体 (くだけた言い方) を数多く使っており、実際の発話から得られた数量的データでも、20 人の学習者の中で常体を一番多く使用していることが判明した。初対面会話でのくだけた言い方が印象を非常に悪くし、母語話者はこの学習者を好ましい人だとは思わなかったのかもしれない。さらに、「INMA」のくだけた言い方により、インタビュアーの戸惑った様子が窺える時があり、二人の会話がスムーズに続いていないと印象付けられる場面もあった。

主観的な意見を付け加えるならば、筆者は調査を企画する段階で、この学習者と電話でのやり取りを何回もしていた。その時も「INMA」はひたすらくだけた言い方をしていたので、筆者自身も戸惑いを覚えたり、失礼だと感じたりして、会う前から良い印象を持っていなかった。

⁸ 崔 (2009) の第8章「数量的データの結果」を参照されたい。

もう一つ、この学習者に気になる点がある。それは「フィラー」の使い方である。上記の図8から分かるように、この学習者は非常にフィラーの使用(10)が多い。フィラーの頻度が多いと、聞きやすくなり良い印象を与えるという先行研究もあり(砂岡ほか2007)、この学習者の場合はその使い方に問題があると考えられる。まず、フィラーのパターンが乏しいことが挙げられる。フィラーをたくさん使っているのに、パターンとして「ま(あ)」系の使用がほとんどである。実際、調査の後、母語話者からはこの学習者に対して「ずっとタメ口なので、失礼だと感じた」「文の始めにとりあえず『まあ』をつけるので、少し使い方が気になった」と感想を述べていた。

加藤(1999)によれば、発話内の文の文頭や文中に用いられる「まあ」の用法は「展開型用法」であり、自分の主張・見解を発展させ、聞き手に何かを説明したり解説したりする場合に用いられるという。この機能から考えられることは、学習者「INMA」は(本人の意図に関わらず)他の学習者より自分の主張・意見をはっきりと言い、また相手の注意を喚起しようとする意欲が強いことにつながる。しかし、そのように取られる面もあるかもしれないが、単純に「INMA」がフィラーの選択を間違えて、あるいはこれしかバリエーションを持っておらず、本来の「まあ」の機能とは異なる意味で使った可能性も考えられる。それらが会話全体に不自然さを感じさせ、学習者に対する印象にも(悪)影響を与えたことが推測できる。

母語話者は、発話の立ち上がりや新しい話題の導入の際、「あの一」「えーと」「じゃあ」を頻繁に使用するが、学習者はこのような前置きがないため、母語話者に比べてスムーズな進行ができない(苅谷2005)という報告が示唆するように、発話の文頭に来るフィラーのバリエーションが日本語学習者には乏しいことが考えられる。

この学習者「INMA」に関しても、実際フィラーはほとんどが文頭で出現しているが、本来の「まあ」の機能としては働いていない。その上、他のフィラーが使用できないためか、仕方なく「ま(あ)」を出現させ、母語話者が聞いていてどこか不自然さを感じる。

5. まとめ

どのような学習者が、そしてその学習者のどのような特徴が、母語話者に好ましいと評価されるのかという問題に簡単に答えることはできないが、本稿での4人の事例から、いくつか好ましさに関する評価を上げる要因と下げる要因が確認された。

まず、好ましさに関する評価を上げる要因として、学習者の表情や笑顔、明るさに加えて、会話に対する学習者の姿勢(協力的、積極的、懸命さ、視線の合わせ方)な

どが重要であると考えられる。さらに、会話での間の取り方も大きく影響を与えられ
思われる。加えて学習者の言語運用能力が優れていればなおさら良い印象につながる
とも言えよう。

事例として考察した学習者「EGFI」は言語形式の面での能力は優れていないが、
それ以外の談話能力は優れており、良い評価を得ている。また、学習者「THMA」の
場合は、言語形式の能力及び談話能力両方に優れており、母語話者の好ましさに関す
る評価において良い印象を与えている。

一方、好ましさに関する評価を下げる要因には、会話に非協力的・消極的な場合が
挙げられる。加えて、話し方の丁寧度が低い場合やフィラーの不自然な使用などが、
評価を下げる要因として考えられる。

このことから、今回のような初対面会話においては、ある程度丁寧な言い方をし、
さらに二人の会話に協力的な姿勢をもち、明るく積極的に会話に臨むのが良い印象に
つながることが分かる。また、野口（2005）が示すように、学習者の声の調子、イン
トネーションに加えて、フィラーの自然な使用が、その学習者への親しみやすさ評価
につながるということからも、フィラーは沈黙や長いポーズを入れるよりは頻繁に使用
したほうが良く、さらに、機能や場面などに合う自然な使用が大事であることが示
唆される。

付 記

本稿は博士論文の一部に加筆・修正を行ったものです。本研究の調査は多くの方々
に多大なご協力をいただきました。また、本稿をまとめるに当たっては、査読者の方々
から貴重なご意見・ご指導をいただきました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 磯友輝子・木村昌紀・桜木亜季子・大坊郁夫（2004）「視線行動が印象形成に及ぼす影
響—3者間会話場面における非言語的行動の果たす役割—」『対人社会心理学研究』4、
87-95
- 加藤豊二（1999）「談話標識『まあ』についての一考察」『日本語・日本語教育論集』
6、名古屋学院大学、21-36
- 荻谷智子（2005）『接触場面におけるフィラーの役割について—会話の参加調整から
みた一考察—』桜美林大学修士論文

- 川名好裕 (1986) 「対話状況における聞き手のあいづちが対人魅力に及ぼす効果」『実験社会心理学研究』26-1、67-76
- 砂岡和子・保坂敏子・Yu Jingsong・河内彩香・山口真紀・藤田真一 (2007) 「フィルターに対する中国語と日本語の印象評価比較ークロスカルチャー・ミス・コミュニケーションコーパスの開発ー」『電子情報通信学会技術研究報告 TL, 思考と言語』107、電子情報通信学会、19-24
- 崔文姫 (2005) 『韓国人日本語学習者の言語・非言語に対する日本語母語話者の印象形成要因』東京都立大学修士論文
- _____ (2007a) 「韓国人学習者の発話の数量的データと母語話者が学習者に抱く対人印象との相関分析」『日本語研究』27、東京都立大学・首都大学東京 日本語研究会、15-32
- _____ 転載：文部科学省科学研究費報告書 (基盤研究 B(2)) 『談話研究と日本語教育の有機的総合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』(研究代表者：宇佐美まゆみ) 2007年、150-164
- _____ (2007b) 「日本語学習者の発話に対する日本人の評価ー韓国人の日本語学習者に対する印象とその印象に影響を及ぼす要因ー」『計量国語学』26-2、計量国語学会、47-63
- _____ (2008a) 「留学生に対して日本人大学生が抱く印象及び印象形成要因ー留学生の発話の評価を通してー」『日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会、115-120
- _____ (2008b) 「韓国人日本語学習者の言語・非言語行動に対する日本語母語話者の印象形成ー異なる属性を持つ母語話者の評価の相違ー」『日本語研究』28、首都大学東京・東京都立大学 日本語・日本語教育研究会、1-15
- _____ (2009) 「日本語学習者に対する日本語母語話者の印象形成ー学習者の発話に関する評価を基準にー」首都大学東京博士論文
- 西郡仁朗 (1997) 「外国人と日本人の初対面会話の分析ー数量的に見た特徴と印象の形成についてー」『科研費報告書 日本人談話行動のスキプト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』基盤研究(C)(2)、58-74
- 野口富美恵 (2005) 「日本人英語学習者の発話におけるサイレントポーズ・フィラーが流暢さの評価に与える影響」『語学教育研究論議』22、大東文化大学、263-282

(ちえ むんひ・首都大学東京オープンユニバーシティ講師)